

第7回「たちばな教育サロン」実施報告

2019年1月22日(水)12時半～14時にかけて、第7回「たちばな教育サロン」をF301教室にて開催いたしました。今回は演習教育をテーマとして、2名の教員から日ごろの演習授業の実践報告をしていただきました。教職員の参加者は14名と少な目でしたが、報告に対する質問が絶え間なくなされ、充実したサロンにすることができました。

本稿では、サロンに参加できなかった先生のために、各先生の演習教育の工夫ポイントをダイジェストでお伝えいたします。

報告1.

「学部生の研究法(卒論研究)実践における院生の関与と導き」

理学療法学科 教授 崎田正博先生

崎田先生からは、理学療法学科の脳・神経障害コースの3年生必修科目「理学療法研究法Ⅰ・Ⅱ」において、卒業研究指導をどのように行っているかを教えていただきました。理学療法学科では、4年次に実習や国家試験対策、そして就職活動がつまっているために、**3年次に卒業研究指導を徹底的に行う必要**があります。しかし専門知識も少なく、実験や研究方法の理解もおぼつかないにも関わらず、研究法の授業は週1コマしかありません。いかに効果的、効率的に研究能力を身につけていくかが課題です。その課題を達成していくために、大きく4つの工夫がなされています。

<工夫1> 早期に教員の研究を手伝う。

学生は、3年生前期に研究方法や研究倫理、各種実験器具や薬剤の使用法、先行研究などを学びますが、並行して教員の実験を手伝います。実験を手伝う中で、座学と実践を関連付け、教科書の知識を実践の知識へと昇華させていきます。

<工夫2> 院生の協力を得る。

崎田研究室には2名の院生がいます。ただし、社会人院生のため平日は17時以降のみ対応可能で、あとは夏休みの間に集中的に協力してもらいます。院生が学部生に対して指導することは、①一連の工程の見学、②模倣、③リサーチノートの記載です。

学部生が院生に学ぶことは双方にメリットがあります。学部生は、**教科書には載っていない(しかし重要な)手順を学ぶ**ことができ、短期間で実験力を高めることができます。一方で院生は、**論理的な説明をする力、議論をする力、後輩を育成する力を高める**ことができます。これらの能力は院生と教員の2者間の間だけでは育成が難しく、教員—院生—学生という3者間で学びのトライアングルを実現しています。

<工夫3> リサーチノートの記載・復習の徹底。

実験研究では当たり前のように使われているのがリサーチノートですが、これを徹底的に活用することが研究力向上の肝になっています。実験を見学した、実際に行った際、リサーチノートに「①意味付け、②気づき、③教科書には載っていない手順」について具体的に記載します。特に失敗したときには「**なぜ失敗したのか**」を**考えて緻密に書かせる**ようにします。

学部生が良いリサーチノートを書けるように、はじめに**教員と院生が実際に書いたリサーチノートを見せます**。これを通じて何を、どこまで具体的に、どのように書けばよいかを理解できます。

さらに重要なことは、次の実験のタイミングで、**前に書いたリサーチノートを必ず見返す**ように指示すること、同じ失敗を繰り返さないようにするために、何をするかを明確にした上で実験に臨ませるようにすることです。

報告 2.

「80名の演習をいかに展開するか」

経営学科 専任講師 西野毅朗先生

西野先生からは、心理学科1年次必修科目「アカデミックスキルズ」で、どのような工夫をしているか教えていただきました。当科目は約80名の学生が履修しており、大学で必要なスタディ・スキルの獲得を目指します。具体的には、ノートの取り方、情報収集、レジユメの作成法、プレゼンテーション能力、レポートの作成法、チームワーク能力、スケジュール管理力等の獲得が目標に挙げられます。教員1名体制でこのような多様な能力を多くの学生に獲得してもらうためにどのような工夫をしているか報告いただきました。

<工夫1>本提出前に修正回を用意する。

レジユメやレポートは本提出の前に、必ず1度学生同士で修正点を探す時間を授業内で確保します。本提出1週間前の授業に2部印刷して持ってくるよう指示します。1部は学生同士で回覧するピアレビュー（相互評価）用、もう1部は教員への仮提出（成績には考慮しない）用となります。

学生は、教員が講義で伝えたポイントやチェックリストをもとに、お互いが作成してきたものに対して良い点や改善点を指摘し合います。批判的なコメントは出てこないと思われがちですが、ここでどれだけ修正点を見つけられるかによって本提出物の成績が変わるので、批判的なコメントを歓迎するムードができます。学生にも相手のために改善点を沢山伝えてほしいと願います。

学生がグループ単位でピアレビューしている間、教員は学生が仮提出したものにさっと目を通し、気になったものピックアップします。特に良いものを選ぶようにしています。ピアレビュー終了後、選んだものを個人名だけ隠してOHCで全体に見せます。どこが良いのかを具体的に示すことで、良い制作物のイメージづくりをします。良いものの中にも改善点はあるので、それについても指摘することで、出来の良い学生へのフィードバック効果も担保します。

<工夫2>教員は“できる”学生をサポートする。

上記のピアレビューを行うと、不満を持つのは“できる”学生です。自分の提出物に対して他の学生からは良いコメントしかもらえず、改善点を見つけられないという不満です。そこで、そのような学生には授業後に教員のところへ来るように指示します。そして教員が赤をいれたり、コメントするようにして、必ずブラッシュアップできるようにします。

実際に教員の元へ来るのは5名程度ですので、十分対応可能です。“できる”学生の能力がさらに高まり、彼らが他の学生をフォローしてくれることによって全体の底上げを狙っています。

<工夫3>プレゼンは別グループで。

プレゼンテーション能力を高めるためには、実際にプレゼンをするのが一番です。しかし80名の学生1人ひとりに、全体の前でプレゼンさせているのは時間があまりにも足りません。そこで、プレゼンもグループ単位で行うようにしています。

プレゼンの準備やブラッシュアップは座席が近い学生同士（チーム）でおこないますが、プレゼンの本番はチームを解体して、全員がバラバラのグループへ移動し、全く新しいグループでプレゼンするように指示します。そうすることでグループ活動のマナー化を防ぐとともに、学生同士でも緊張感をもったプレゼンテーションにすることができます。学生もグループメンバーに依存しているばかりでは一人で行う最終プレゼンに支障をきたすため、責任感をもって取り組むようになります。

評価方法でもひと工夫します。プレゼンテーションはルーブリックを用いて学生同士の相互評価してもらいます。この時、個人がつけられた個人得点に、チームメンバーの平均点を加算します。こうすることでチームとしての連帯感、つまり一人ひとりのレベルをみんなで上げようという意識をつくることができます。

崎田先生、西野先生、ありがとうございました。今後も同僚性を生かした教育開発支援の場として教育サロンを続けてまいります。引き続き、ご協力ならびにご参加いただければ幸いです。